

一歩み始めた TICO の事業一

国際協力活動を評価する際、様々な手法や視点があります。その中で高評価に値するには、援助により実施された活動が、いかに現地社会に根付き、現地のリーダーが中心となり運営・管理が行われ、かつ活動自体が経済的に自立、発展していきけるプロセスに入ることであると思います。

ザンビアは、世界の国際協力活動の舞台から見ても、プロジェクトが「自立」し「発展」していくまでに導くことが非常に困難な環境であると各団体も認識しています。

そんな中、TICOが実施してきた活動のいくつかは、自立のステップを踏み始めています。

その一つが、『ンゴンベ地区で実施されている民生改善教育活動』です。



この活動はTICOが1997年に国際ボランティア貯金の配分金を得て実施した支援活動で、今では現地の職員が中心となり管理運営され、TICOは小額の無償資金支援を行うだけですが、活動は立派に継続されています。

二つ目として、JICAの小規模開発パートナー事業として実施した『ルサカ市内の公立診療所でレントゲン診断ができるようにしたX線プロジェクト』です。実施1年後には、保健省が一般予算を組み、通常の医療診療活動の一つとしてレントゲン科を自らの手で運用しています。



そして、三つ目が最近ようやく自立しようとしています。『市民によるルサカ首都圏を守る救急救助隊整備プロジェクト』です。



一困難が予想されたプロジェクト一

さて、ここからは、私が担当する救急隊活動について、もう少し詳しく紹介いたします。

この活動は、人口200万、面積として約1000平方kmをカバーする「救急システムの構築」という大型プロジェクトです。しかも、一般市民のボランティアを活用するというものです。

立ち上げ当初、

- ・基本的なハードとなる救急自動車や救助車両の投入などに多額の費用がかかり、そこまでして、活動を実施する価値があるのだろうか？
- ・ザンビアでは車両のメンテナンスが十分にできない可能性もあり、持続しないのではないかと？
- ・運営費を抑制するためとはいいい、無償ボランティアを活用する方法には限界があるのではないかと？
- ・指導を行う日本人専門家がいなくなったら、すぐに頓挫してしまうのではないかと？

など、多くのご意見をいただき、ご心配をお掛けしました。

確かに、最貧国であるザンビアにおいて無償のボランティア隊員が活動の中核を担い管理運営を行うとともに、極度の緊張を強いられる現場で、危険と隣り合わせの状況で、12時間の勤務時間を全うすることなどできるのだろうか？将来、持続的な活動に発展しないのではないだろうか？と総括している私自身でさえ思うこともありました。

ちなみにJICAやUNもそして多くの団体もザンビアではボラ

ンティア要員を活用し、プロジェクトを実施していますが、成功することは非常に困難と認識しています。

一救急プロジェクトの自立発展性は？一

今年3月、救急救助隊管理委員会のメンバー（ボランティア）を招集し、特別な会議を開催しました。その会議で、私は「このまま自立の道を探れないような委員会であれば、救急システムを解体し、活動のすべてを公の機関である警察庁とルサカ市消防本部に移譲し、委員会は解散する」ことを告げました。加えて、「TICO・SCDPからの支援は本年12月31日をもって終了する」ことを伝えたのです。

管理委員もボランティアで参加している地域のリーダーです。本来、彼らには活動を続けなければならないという責任はありません。言ってしまった後、これは「まずかった」と反省をしたものです。しかし、委員会は自立のために立ち上がり、有力な企業や団体へダイレクトメールを出すと言ってきました。内容は、「ボランティアが救急救命の活動をしています。どうか、支援をしてください。ザンビア人の手で自ら運営させてください。」と訴えたのです。

私も無視するわけにいかず、レターを多量にコピーして、後押ししました。このように団結して、士気が高い時には、良いことが起きるものです。

一民放TV局が救急活動を番組に一

以前ルサカ市には国営テレビ局が1つあるだけでしたが、最近になって、民放が1つ誕生しました。MUVIテレビという会社です。

今年4月、このTV局のアナウンサー2名がチャイナマ病院にあるボランティア救急隊の本部を訪れ「サイレンを鳴らして走って行く救急車を良く見るが、何をしている団体なのでしょうか？話を聞きたい」と言ってきました。丁度その時、

私も本部事務局にいましたので、「ザンビア人がザンビア人をつくりザンビア人を救う命の救急隊です。」と言いました。アナウンサーたちは、「みんなボランティアなのですか？」と聞き返してきました。「そうです。こんなザンビア人に遭うのは珍しいでしょう？」「こんな立派な志をもったザンビアの人がいるのです。」と答えました。この会話のおかげで話が進んだかどうか分かりませんが、その後MUV1テレビ局から、「救急隊活動を密着取材し、それを毎週月曜と金曜（再放送）で放映してみたい」と言ってきました。

早速、委員会を招集し検討しました。「よし、やってみよう。」「でも、失敗も成功も全てあからさまに国民に見られる。」「プロにも見られる。」など、様々な意見がありました。委員長が「それでもやろう。失敗を見てもらう。そこから何か生まれるかもしれない。」という発言があり、取材を受けることになりました。

取材は毎週土曜日の夜から日曜の朝までやることになり、それらの映像を編集し、週2回の放映を13エピソードまでやってみるということで話が決まりました。

委員会からは、全て見せる代わりに番組の最後に、市民向けの教育的な広報と救急隊活動に支援をしてほしいと訴える内容を入れてくれることを要請し、テレビ局も同意、テレビ局がスポンサーになってくれた形となりました。

ールサカ救急隊 24 時！ 放映ー

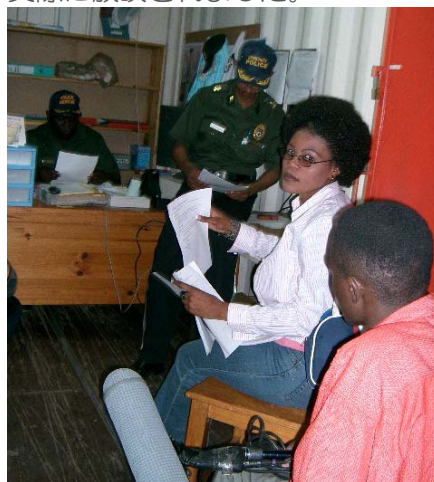
いよいよ「ルサカ救急隊 24 時」が始まったのです。2001 年にザンビア初の救急隊が誕生して以来初めてその全容がテレビで放映されることになりました。

取材当日、みんな緊張気味です。隊員も一番の隊員を配置し、委員長も制服姿で参加。救急隊本部で撮影の準備に入りました。すると、いきなり救急要請の入電です。「救急隊 18 号および 16 号、チャイナマグート前国道上、交通事故、車両が横転。怪我人がいる模様。」早速取材

第 1 号の出動です。現場は本部から目と鼻の先で、事実事故の音がしたため、手際よく出動はできました。現場では、撮影のため緊張している隊員は、サイレンを消し忘れ、がんがんサイレンが鳴ったままです。

現場では、すでに野次馬の 2 名が怪我人の手や足を引っ張って無理矢理車から出そうとしています。「あー、ダメだよ。」今日の撮影の終わりに怪我人は無理に車両から出そうと引っ張らないようにと注意する教育広報をやろうと言っていた矢先の出来事でした。まさに、野次馬が怪我人を荷物のように車から出していました。「やばい、全部撮影されている。」と冷や汗が出ました。

こんな撮影を繰り返し、3 回ほど実際に放映されました。



その後、なんとルサカ市内の複数の会社から「どのような活動をやっているかもっと詳しく知りたい」と問い合わせが殺到するようになりました。テレビの影響はすごいです。

その一つ、ナイトホーク警備会社はボランティア救急隊の運営管理費である月 15 万円を毎月支援するというのです。また、民間銀行からは消耗品の寄付。ある保険会社からは隊員と救急車の保険を提供する話も出るなど、正にザンビア人だけで、この救急救助システムを存続させようという動きが始まりました。

私は、「その時、歴史は動いた。」と感じたほどでした。

これまで、ほぼ毎日のように TICO/SCDP に対しての「欲しい」と「支援してくれ」ばかり状況で生活してきた日本人職員にとっては、驚きの事件でした。

ー存続をかけてー

そんな努力があり、今では救急車両のメンテナンスなど委員会独自の予算で実施することが可能となりました。また、事務経費一部を毎月支払いできるようになるなど、正に自立に向け確実に前進しています。もちろん全ての課題を完全に解決したわけではありませんが、自力で活動をしようとする性格が多くにみられるザンビアの人々が自力でスポンサーを探し、自力で救急隊活動を継続できるように真剣に動いているのです。ザンビア活動 9 年目にしての快挙でした。

このたび、私はしばらくのお休みをいただき、5 ヶ月間ほどの予定で日本に帰国しました。

この日本人専門家の不在期間は、ルサカ救急隊が潰れてしまうのか、それとも歯を食いしばり前進していけるのか「サイレントモニタリング（静かなる評価）」期間と位置づけしています。

このまま、委員会のメンバーが一丸となり、日本人専門家が不在でもやっていけるという自信をこの 5 ヶ月で育てていただきたいと思います。

TICO が誕生して 12 年が過ぎようとしています。苦難の連続ではありますが、草の根の活動は確実に前進しています。この他にも、現在カルブエ農村地区で実施している「農」と「水」を中心とする活動も、地元の村人とともに生活の向上を目指し、毎日、担当職員は「土」にまみれています。

まもなく、この活動が村づくりへと転進する大きな起爆剤となることでしょう。

TICO ががんばっています。



特定非営利活動法人 TICO

779-3403 徳島県吉野川市山川町前川 2 1 2 - 6

TEL:090-7786-3193/FAX:0883-42-5527

e-mail: zikomo@nmt.ne.jp

URL: <http://www.nmt.ne.jp/~zikomo/>